

# 世界の人びとのための JICA 基金活用事業・業務完了報告書

1. 業務の概要：	
(1) 事業名	「2015 年ネパール大地震 被災地の子どもたちと女性たちのための復興コミュニティづくりと学校教育支援事業」(通常枠)
(2) 実施団体名	NGO ネパール『虹の家』
(3) 実施期間	2020 年 8 月 26 日 ～ 2021 年 5 月 31 日
(4) 実施国	ネパール連邦民主共和国
(5) 活動地域	カトマンズ郡 ゴカルナ スンダリジャル地域
(6) 活動概要	
<p>①活動の背景：</p> <p>「震災前より豊かなコミュニティづくり」を目標に、サヌタリ村を中心に復興支援のプロジェクト事業を進めてきた。2018、2019、そして、2020 年の 3 年間は「世界の人々のための JICA 基金活用事業」を受託し、村の復興は大きく前進した。地域の学校には、図書室ができ、給食も始まった。その原動力となったのが、カウンターパートメンバーやサヌタリ村の人たちである。みんなが主体的に事業へ取り組む意識が向上し、女性が自分の働き方を見つけたり、子どもの学びや居場所が生まれたりと、今までのコミュニティのもつよさの上に重ねられた取り組みとなった。</p> <p>復興の真ん中に子どもたちを置き、子どもたちにとっての最善を考えたプロジェクトを虹の家からの提案し、改良を加えながらサヌタリ村の人と共有して進めることができた。地震から 5 年が経ち、中期プランを進めるときに COVID-19 により世界のパンデミックが起こった。ネパールでは職を失い、食べることに事欠く生活を送る人が町にあふれた。プロジェクトのほとんどは形を変えながらもカウンターパートメンバーの力で進めていくことができた。特に、スンダリジャル地域での有機栽培米作りを始める決断は、みんなを元気づけ、サヌタリ村の有機栽培野菜が食料となったことは、農業の大切さを実感させた。人々は改めて「食と職」を求め、生活基盤を強くするための農業、収益を求めての農業ビジネスへと舵を切る意向を固めた。</p> <p>サヌタリ村の人々は、地震災害やコロナ禍を体験した中で、農業プロジェクトや女性自立支援プロジェクト事業に“仕事と収入を得て生活基盤を強くする”という明確な目標を持った。虹の家の活動は、「ネパールの人々の願いを実現する」こと、その原点に立ち返った 1 年となった。</p>	
<p>②活動の目標</p> <p>「新サヌタリ村プロジェクト」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・有機栽培農業技術」を向上させ販売システムの構築と販路を拡大する。</li> <li>・学校給食へのサヌタリ村で収穫された有機栽培野菜の提供や給食メニューレシピづくりなど地域貢献活動を推進する。</li> <li>・「生活改善」「子ども土曜クラブ」「女性の自立」に加え「地域防災」に取り組む。</li> </ul> <p>「スクールプロジェクト」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・幼児教育への支援と「清潔で健康的な学校生活」を目標に給食に関わる衛生環境の改善を目指す。</li> </ul> <p>「女性自立支援プロジェクト」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自主的な組織運営のための実務研修と洋裁技術向上のための研修を充実させソーシャルビジネス起業にむけての準備を進める。</li> </ul>	

## 2. 業務実施結果：

### (1) 実施した内容

#### 「教育支援」

#### 親を亡くした子どもたちへの通学支援

##### 【実施内容①】教育奨学金支給

- ・サヌタリ村の親を亡くした子どもたちへは教育サポーター制度を作り、奨学金支給と里親とのメッセージ交流を通しながら心のケアに努めている。
- ・オクレニ小中高校の親を亡くした子どもたち 25 人へ教育奨学金を 3 年間継続して支給できた。コロナ禍では親が職を失い収入がない家庭も多く、次年度の支給も検討している。

#### 「新サヌタリ村プロジェクト」

#### 復興コミュニティづくり

##### 【実施内容②】有機栽培野菜づくり農業 と有機栽培米づくり と農業研修

- ・ロックダウン中も政府は農業だけは推奨。有機栽培野菜作りと米作りが地域の食を支えた。地域で始まった米作りは、安心と今後の備えとしての農業へ期待を寄せる結果となった。

##### 【実施内容③】農村部女性たちの自立支援 働き方

- ・サヌタリ村の女性たちは、農業や洋裁から、少しずつ収入を得ている。女性たちの目標は経済的自立と社会的自立である。農業プロジェクトへの参画と役割、地域への貢献活動など、そして、女性たち自身の成長を喜びとしている。

##### 【実施内容④】土曜子どもクラブ 国際交流

- ・サヌタリ村では子どもたちの学びを支える寺子屋式の取り組みが着実に実を結んできている。今、英語教育と読書が定着し、子どもたちは将来に役立つ学びの機会を得ている。この方法をモデルケースとして他の村にも普及させていきたい。

#### 「スクールプロジェクト」

#### 被災校への支援事業

##### 【実施内容⑤】給食から始まる食育

- ・長いロックダウンの結果、教育の機会が失われた。再開後、給食を支給することで登校する子どもたちが学校へ通う楽しみが増えた、との報告がある。また教師たちは、コロナ禍で「手洗いとマスク着用」の大切さと自分の身を守るための衛生教育の必要性を実感したそうだ。
- ・「給食から始まる食育」のための学習材等の提供を続ける。
- ・給食室環境整備や図書室の本を増やなど、学校内での子供の居場所づくりを進める。

#### 「女性自立支援プロジェクト」

#### ソーシャルビジネス起業に向けて

##### 【実施内容⑥】新商品開発と収益の上がる販売

- ・ジョルパティにトレーニング場に通うこともできない状況の中、女性たちは家庭で手元にある布を使って物を作り続けた。また、地域の貧困家庭への緊急食糧支援活動や炊き出しなどにも取り組むなど、女性たちの協力で頭が下がる。ソーシャルビジネス成功を担う人材が育つ。

#### 国内活動

##### 【実施内容⑦】つながって ネパール

- ・虹の家活動記録の「5周年記念誌」が完成。今後もネパールの復興とよさを発信していく。

## (2) 実施成果

プロジェクト名	実施項目 成果 (○) と 課題 (△) 未実施 COVID-19 による (▲)
1. 教育支援	<p>(○) サヌタリ村の親を亡くした子どもたちの教育支援と心のケア</p> <p>(○) オクレニ小中高校の親を亡くした子どもたちへの JICA 基金教育奨学金支給</p> <p>(▲) 教育支援受給対象 保護者会 支援内容説明▶協力依頼</p> <p>※ 学校長とカウンターパートメンバーが各家庭を訪問し、JICA 事業による教育奨学金についての趣旨を説明後、支給し、領収書を受領。</p>
2. 新サヌタリ村プロジェクト	<p>(○) 有機栽培農業の生産量アップと作付け種類の多様化と販売</p> <p>(◎) 有機栽培米作り 開始</p> <p>(△) 共同組合組織づくりに向けての準備を行う (女性参画)</p> <p>(△) バグドゥワル小地域への農業指導▶ (サヌタリ村より)</p> <p>(△) 「学校給食サポートプログラム」学校給食へ地域の食材を提供</p> <p>(▲) 給食メニューレシピづくり料理教室開催▶女性の地域貢献活動</p> <p>(○) 家庭で出来るフェルト小物づくり (女性の収入として)</p> <p>(△) 「子ども土曜クラブ」英語教育に取り組む</p> <p>※ 課題となった項目についてはいずれも、3月から12月まで政府によるロックダウンが行われ、移動禁止の状況が続いたが農業関連は成果を上げた。</p>
3. スクールプロジェクト	<p>(○) 給食環境整備 ランチテーブルとイスの設置</p> <p>(▲) 「食と健康」のリーフレットを活用しての交流授業</p> <p>(▲) ドクターキャンプ 健康調査 内科・歯科検診の実施</p> <p>(▲) 幼児教室環境整備と学習材提供</p> <p>(△) 図書室の蔵書を増やし、絵本から広がる学びを創る</p> <p>※ ドクターキャンプが実施されず「食と健康」プログラムは1年足止めとなった。幼児教育の学習材の制作はボランティア活動で制作中。JICA 基金を活用して日本国内で購入した英語の書籍等は、渡航ができた時に持参する。</p>
4. 女性自立支援プロジェクト	<p>(○) 新商品の開発 (ネパール布地を生かした小物とパンツスーツ)</p> <p>(△) 洋裁技術研修の実施</p> <p>(△) 2022年のソーシャルビジネス化に向けて組織運営、マーケティング研修</p> <p>(○) 日本とのオンラインミーティングに参加。商品デザイン協議。商品の発注業務などが行えるようになった。</p>
5. 国内活動	<p>(○) 10月 市民交流事業「第2回 ネパール祭り」開催</p> <p>&lt;1日目&gt;ネパールサヌタリ村子ども土曜クラブ と 西宮市 Sewa School の子どもたちとのオンライン交流</p> <p>&lt;2日目&gt;「虹の家5年間の支援活動」報告会</p> <p>(◎) 5月 農業研修会開催</p> <p>講師 元 JICA ネパール協力隊員 石川栄貴さん 森島あやめさん</p> <p>ネパール 東京 沖縄 兵庫をつないでのオンライン研修会</p> <p>(○) 5月 NGO ネパール虹の家 「5周年記念誌」完成</p> <p>※ 5月農業研修会は実りが多く、今後の農業プラン作成や事業の方向性を創ることができた。</p>

### (3) 得られた教訓など：

ネパール渡航が叶わなかったこの1年間、やれなかった事業と新しく始まった事業、そして新しい発見があった。それは、ネパールの人の底力である。カウンターパートのラズさんとスリヤさんは現地事業のすべてを担い、また、日本とのオンライン協議や四半期ごとの現地報告も全て誠意をもって行った。JICAで教わった途上国支援の基本は「魚を与えるのではなく、魚の取り方を伝える」、それが目標であることも理解している。現地の人たちが、目の前の課題「食の確保」に主体的に取り組み解決できたことの意義は大きい。

これまでの5年間を振り返り、これからの5年間の中期プランの再構築が急がれる。目標は「地域のために活躍する人材を育てる、農業はじめ収益の上がる事業を創ることで地域の力になる」である。

有機栽培米づくりからはネパールの人たちのチカラとコミュニティの持つ伝統の助け合いの精神を教えてもらった、田植え歌や作業終了後の食事風景などは日本の原風景とかさなり、共通な“文化”も見えた。

ネパール JICA デスクのティミルシナ祐佳さんが「途上国支援で一番大切なことは信頼関係を築くことかな」と、サヌタリ村を視察されながら話されたことがある。

5月に完成した「虹の家5周年記念誌」の最終ページには代表副理事プリタムさんの寄稿文の題名にある「日本とネパール、それぞれのいいところを合わせて進む虹の家」、そして、カウンターパート代表のビルさんはメッセージの文に「みなさんは何度もネパールへ来て子どもたちのために支援を続け、復興のためのプロジェクトを進めてくださいました。その支援活動の全部がネパールの人たちを強くするために本当に大切で必要なことでした。」と述べています。私たちは、これからも、互いに尊敬し合い、信じ合いながら「ネパールの明るい未来のために」活動する仲間になれたことを嬉しく思う。

### (4) 今後の活動・フォローアップの方針：

#### 5年後のスندアリジャル地域

#### ⇒ SDGs 目標

- 目標1. 農業でスندアリジャル地域を元気にする。 ⇒ 自然環境保護と里山の暮らしの共存
- ・有機栽培野菜作りの推進
  - ・販路拡大
  - ・地域の環境条件を生かした特産物作り
  - ・有機栽培米を学校給食へ安定供給する
  - ・食と栄養への関心を高める
- 目標2. 子どもたちを心も体も健康にする。 ⇒ 質の高い教育をみんなに
- ・子どもたちの学びの世界を豊かにする。 絵本や学習教材の提供
  - ・学校給食を安定的に届ける。「食と健康」プログラムの推進 「衛生教育」
- 目標3. 地域の活性化を図る ⇒ 働きがいも経済成長も ジェンダー
- ・コミュニティの中で子どもが育つ仕組みづくり（サヌタリモデルの提供）
  - ・働く場所があり収入が定期的に得られる。（野菜の販売）
  - ・女性の居場所づくり（洋裁トレーニング場 兼 工場）

#### 達成するためのアクティビティ

- ① 活動拠点 「Friendship Child Center」を建設する。
- ② 農業プロジェクトから生まれる新しい商売を起業する。
- ③ 子どもたちを中心に「食と健康」「保健衛生」他、健康に関する取り組みを実施する。

今、日本や世界でも注目を集めている協同労働の仕組みを取り入れた「みんなが経営者」組織づくりの準備に入っている。ネパールにも互いに助け合う農協なような組織もあるという。現在取り組んでいる農業プロジェクトや女性自立支援の洋裁を起点に多様なソーシャルビジネスを生みだしたい。それらを協同組織化することで学校教育や給食への助成できることや社会的弱者への基金が作れないかと考えている。

### 3. その他(活動中のエピソード・感想・写真など)

「新サヌタリ村プロジェクト」より

ネパールからのお便り 3月

～地震でシングルマザーとなった女性たちの5年間～



農園で草引きをしている 左奥の女性がリヌさん、手前がマイリさん。キャベツの収穫の後、春野菜の作付けの準備に入る。

#### 春を待つ サヌタリ村

1月、2月、そして、3月。寒い冬がゆっくりと過ぎ、サヌタリ村は春の準備を始めています。

マイリさん（サニー、サンディッシュの母）は、2015年の地震で、リヌさん（サンジャイ、サンジャナの母）は2016年の冬、病気でご主人を亡くされました。2015年9月にサヌタリ村に入った私たちは、闘病中のリヌさんのご主人に出会っています。その時、ご主人から「どうか二人の子どもたちを学校へ通わせてください」と頼まれました。父としての家族への思い、地震で家を失い、自らの病の先を考え、お父さんは二人の未来を私たち虹の家に託したのです。

それからの5年間、マイリさんとリヌさん、二人は『虹の家』の現地プロジェクトに参加し、オクレニ小中高校の図書室整備、ジョルパティでの洋裁のトレーニングや有機栽培野菜作りに熱心に取り組み、その対価も支給してきました。二人は、子どもたちの成長と将来の進路のために働いて収入を得ていきたい、という願いと夢を持っています。

マイリさん、リヌさん、そして、写真にはいないですがムナさん（ティナとユナの母）が進む道にも春が来るように願っています。

(※「ネパールからのお便り」は、毎月ネパールからくる写真とメッセージを 虹の家の月例報告に掲載している)

ネパールからのお便り 5月

～ 有機栽培米作りの準備が始まりました ～



水田の雑草引き



畝を作って 稲の種を直まきにして苗に育てる



ネパール米の種

## 「スクールプロジェクト」

### 【実施内容④】 給食実施 「給食室 衛生的な食環境づくり」

虹の家は、オクレニ小中高校幼児クラスと小学生低学年 35 名、スンドリジャル小学校 70 名、そして、バグドゥワル小学校 50 名を対象に給食支援を行っています。2019 年には給食関係備品（ガスコンロ、鍋、食器）を整え、順次、給食を開始。2020 年度は、オクレニ小中高校には JICA 基金を活用してランチテーブルとイスを納入することができた。



給食室前で お礼の気持ちを伝える スンドリジャル小学校の子どもたち

2 階の空き教室をランチルーム専用教室にリホーム。衛生的な調理ができる環境や設備を整えた。今後は、地域での有機栽培野菜作りを推奨し、給食の食材として提供してもらおう事業を進める。



リホーム前のランチルーム 2019 年



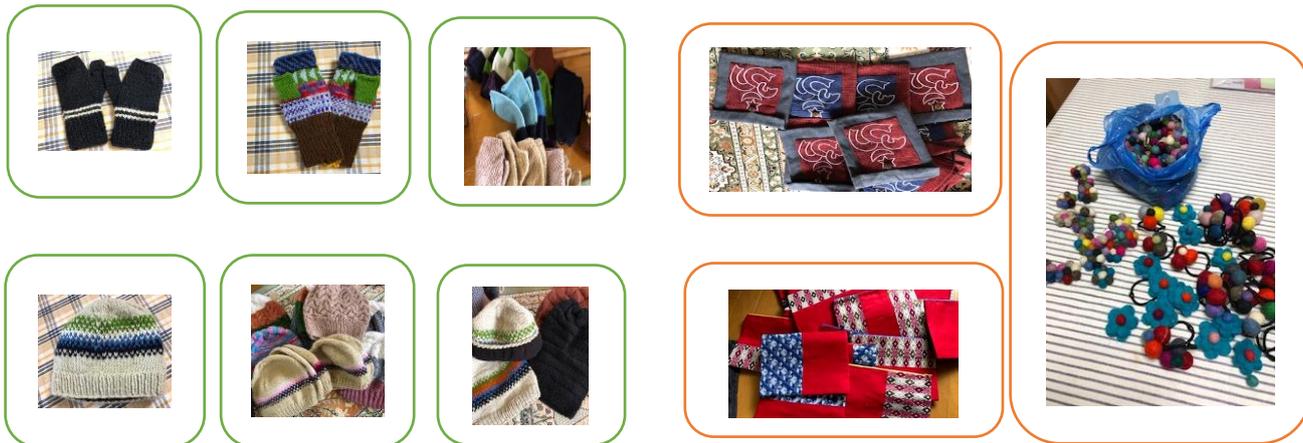
校舎の 2 階教室がランチルームに 2020 年



白いペンキで明るい空間になり、清潔感が出ている。壁面にはネパールらしく野菜などのイラストが描かれ、食育の一つ。

## 「女性自立支援プロジェクト」

1月16日(土) Sahayogi から新商品ニット商品とネパール布のポーチとフェルトブローチが届きました。



高槻、尼崎、そして、元町の各店頭に並べていただいています！！ ニット商品は繊細な編み方が好評です♡

2月21日 (日) Sahayogi の女性たちとのオンラインミーティングを行いました。



「ネパールの人たちの夢や願いを叶えるために頑張りましょう」。この日のチーム会の締めくくりに畑中トキ子さんのこの言葉。“灯台”の灯りだと思えます。画面の向こうにいる女性たちに、Sahayogi 新商品の納品のお礼と感想を伝えると、とても喜んでくれました。彼女たちが制作したパンツを香代子さんや真知子さんが試着して見せ、安里さんが日本で購入したチュニックを紹介すると、まるでファッションショーのような歓声と拍手が起こりました。COVIT-19 下、新しいミーティングの形ができてつづります。トキ子さんの言葉通り、活動の原点が見え、前向きな発想が生まれ、つながることの楽しさを満喫した時間になりました。

左から 野澤洋子 プリタム 堀田香代子 畑中トキ子 増田安里 次の商品について協議 (撮影者 福谷真知子)

3月21日 (日) 例会にて 女性ソーイングチーム報告

はじめに、畑中トキ子さんから、1月、2月、3月のソーイングチームの活動の報告と今後のSahayogi 支援について「今後の方針としてネパール生地の良いを生かした “商品企画 販路の確保” が収益を上げる」との説明がありました。



その後、新製品についての提案や討議が始まりました。続いて、新商品についての具体的な協議が行われました。

1月に入荷したニット商品の出来栄は12月のオンライン会議で依頼したことを踏まえて改善され、品質も良くなっている。

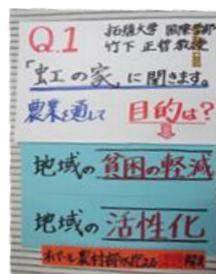
## 「農業プロジェクト」

4月18日（日） 「農業プロジェクト」 研修会① 西宮大学交流センター

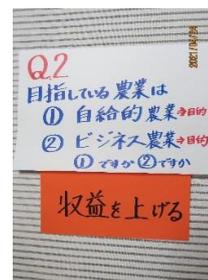
拓殖大学国際学部竹下正哲教授からいただいたメールのご質問とアドバイスを Q & A 方式で紹介。



アナログな説明方法で Q1



Q2



竹下教授 Q1. 農業を通して その目的は何ですか。

福谷真 A.➡ **貧困の軽減 地域の活性化**

Q2. 目指しているのは、どのような農業ですか。

ただ住民が食べていくだけの「自給的農業」なのか、それともお金を稼いでいけるような「ビジネス農業」なのか？

A.➡ **農業従事者はビジネスとして展開していく希望**

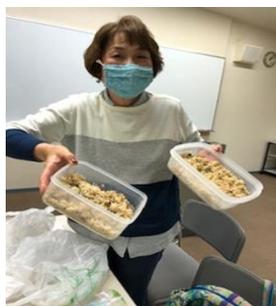
前者（自給自足）の場合は、どうやって貧困を解決したり、地域活性化に結び付けたりしていくのか。子どもを学校へ通わせたりするお金をどうやって稼ぐのか。

後者の「ビジネス農業」の場合には単に日本の農家が日本式栽培を教えに行くだけでは必ず失敗します。どのような作物を作れば、収入を増やせるか。そのためには、どのような栽培方法をすればいいか、ということですが。（従来の日本式では無理です。手間暇がものすごくかかる割に、収穫量が少ないので、結果としてコストがものすごくかかります）

以下 質問は Q7 まで展開されましたが、竹下教授のアドバイスに基づいて農業プラン作成中

### 同日「ネパール米」試食会

2020 年度のコロナ禍で始まった米作りの初収穫のネパール米です。ネパールの農法で、田植えから稲刈りまで、人の手を使って収穫できたお米。1 月、プリタムさんが持ち帰りました。それを増田安里さんが調理して持ってきてくれました。



ネパール米を紹介する増田安里さん

香辛料使いが洋風パエリアのような味わいいただく野澤洋子さんとプリタムさん。

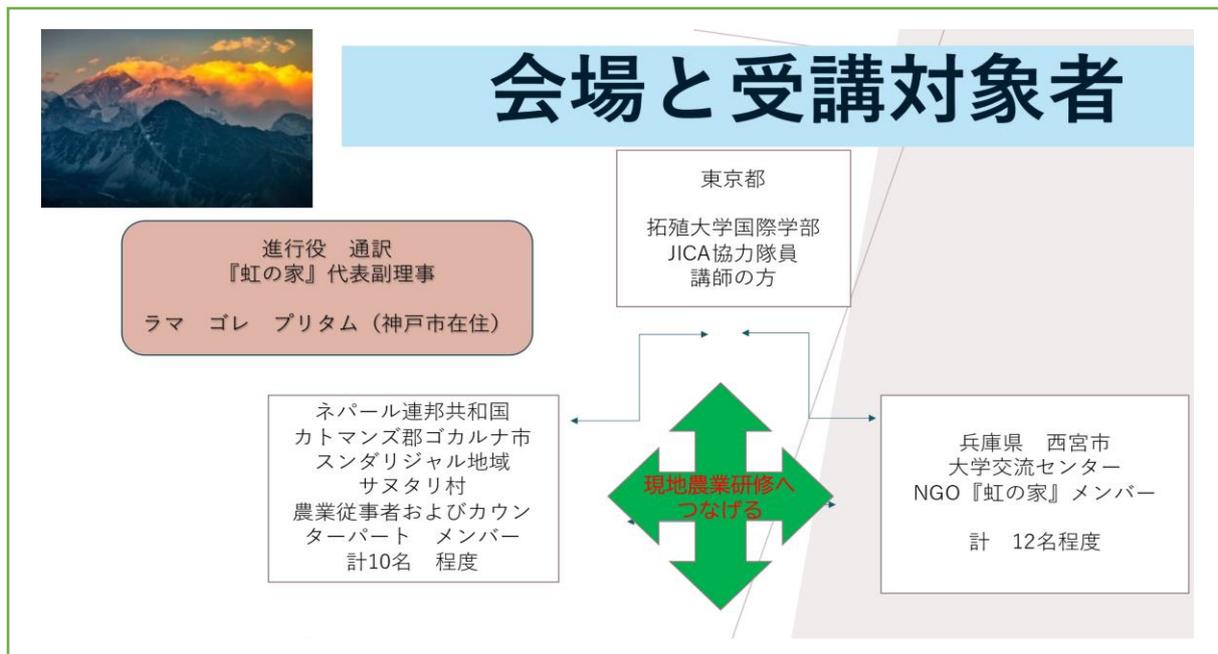
・収穫されたネパール米が学校給食の食材として提供できる日が待ち遠しいです。（野澤洋子）

### 感想

・安里さんごちそうさまでした。タッパウエアーのふたが空いたとき、いい香りがしました。ネパール風ではなく、少し洋風の感じですね。お米は細長く、タイ米に似ていますが食感はしっとりしていて、「これがネパールの人が収穫したお米だ」と思うと、一層おいしく思いました。

（福谷 清）

会場 西宮市 大学交流センター ➡ **変更** 各家庭会場  
 内容 別紙 当日プログラムあり  
 方法 オンライン Zoomを使って



参加者 地域一覧

### 当日の様子



講師石川栄貴さん(左) 現地映像を使って 講師織島あやめさん(右中央) 石川さんへ質問する野澤さん  
 調査で各家庭一軒一軒を回って ネパールラズさんアミツさん(右下) 通訳をする プリタムさん

### 6. 参加者感想

一年数か月、その土地を歩いて知り、その土地の人々と共に暮らしてこられた中でのお二人のお話はとても、心に響くものでした。中でも、森島さんが、「巡回する上で私たちが意識していたことは、ゴルカ地域での文化の違い、民族による生活の差がある中で、人々が何を求めてどうしていきたいのか、その心にふれること」とおっしゃったことは、サヌタリ村を始めネパールに関わる私たちにとっても、本当に大事なことで、決して忘れてはいけないことだと改めて強く思いました。そして、そうした地道な活動があったからこそ、地域実態に即した農業技術の指導や農作物の提案、コロナによる帰国でやり残さざるを得なかったけれど、収入をうみ出す様々な具体的提案につながっていかれたのだなと思いました。 < 中略 >

また、スリヤさんやラズクマルさんたちが、小さな土地であっても今実施している農業に手ごたえを感じておられ、それをより良くしようという意欲や、講師の方々の話を受けて自分たちの親世代の農業に思いを馳せ、焦らずより良い農業をしていこうとしておられる熱意もすごく伝わってきました。 < 後略 >

## 現地活動緊急支援活動

「ネパールからのお便り」 3月

緊急食糧支援活動報告



### ナバラズ 代表者 カズキさんから

ジョルパティ ナラエンタールにあるアルタベディック BI group という障がい者施設です。ここでは、地震や事故で障がいを持ち、家で暮らすことができなくなった人たちが暮らしています。毎日、リハビリ、エクササイズやゲーム、そして、仏教画を描いたりおしゃべりをしたりして過ごしています。今は、コロナで訪問者もなく、どこへも行けないなか、久しぶりに楽しい時間を過ごすことができました。ご飯もとてもおいしかったです。ありがとうございました。

### International Sewa society スリヤさん リタさん から

ジョルパティのトレーニング場前で、ボランティアの人と一緒に食事を 150 人分用意しました。メニューは、肉のカレー、アチャール、青菜の炒め物、サラダ、豆のスープです。喜んでいただき、とても嬉しかったです。日本からの支援に感謝申し上げます。

### (3) JICA 基金活用事業を受託したことで団体の成長につながった点・良かった点

はじめに、「世界の人びとのための JICA 基金」を 3 年間受託できたこと、そして事業報告、経理など国内での庶務関係に対応し、教えていただきました職員の皆様に感謝申し上げます。

2015 年ネパール地震被災地の人々のためにと立ち上げた、設立 3 年目の NGO の申請書類が採択されたとき緊張しました。毎年、カウンターパートの人たちと一緒にネパール JICA ネパール事務所を訪問するなどして JICA 事業の趣旨や意義を共有することに努めました。そのことは虹の家や International Sewa Society にとって、国際協力事業や草の根の市民交流のベースメントになりました。

#### 以下、良かった点について

- 被災地復興支援事業として 4 つのプロジェクトを同時進行できた。(俯瞰して受け入れていただけた)
- 農村部がかかえる複合的な課題「貧困と生活改善」「貧困からの脱出解決のための子どもの教育」「女性の働き方と自立」という負の連鎖から抜け出すための視点持つことができた。(SDGs の目標達成)
- ネパール現地事務所から、ネパール政府の方針や JICA が進める事業方針などたくさんの情報をいただき、JICA 事業を理解することで、それらのことを虹の家の現地事業に取り入れることができた。
- 「事業計画」「事業報告」の作成、とりわけ経理面での書類作成基準等を教えていただいたことを継続している。今後も、この様式で事業を使わせていただきます。

#### 他の助成金等との相違点

- 2018 年 味の素ファンデーション (不採用)                      2019 年 全国生協連 (一次審査通過)
- 2018 年 2020 年 ゆうちょ財団 (不採用)                      兵庫県国際交流協会 3 年間助成金受託
- それぞれの申請書の 카테고리には重点内容や専門的な観点「栄養改善」などが求められたり、専門家の存在が必要であったり、難しいと感じた。虹の家のように課題解決プログラムが多様になり、その循環から得られる成果についても十分に説明しきれなかったことと考えている。しかし、虹の家は、設立 3 年目から JICA 事業に採択されたことで、NGO 団体としての質を高めながら育てていただけたと思っています。